

火の玉が飛んだ

「みんながめかけの子、めかけの子って苛めるの」と貞子の胸で泣いたまつ子も高等小学校を卒業し、政治郎の経営する電気店で働いていた。おばさんはだんなの死んだ後を追うように男の子も腎臓を患って死に、それ以来娘と一緒にあの六畳の部屋で生活をしてきた。

そんな或る夜、貞子の所へおばさんとまっちゃんが「お父さんに話があるんですが・・・」と茶の間にやって来た。まだ政治郎は帰っていなかった。

「もう帰ってくる時間だよ。そこで待っていれば？」という間もなく玄関を開ける音がした。

「只今」

「おばさん達がお父さんに話があるって、待っていたんですよ」

「何の話かな？」と云うと茶の間に行った。

二人は最初、もぞもぞしていたがおばさんが

「お父さん、前から考えていたんですが、まつ子も年頃になつたし、前から二人で暮らしたいと思っていたので、どうでしょう、此処からお暇はいただけませんか・」

「何処に住むんだい？」

「この先の拘置所の前に下駄やの住まいがあります。その二階が空いているのでそこを借ります。誰もいないので、留守番代わりで家賃はいいというものですから」

下駄やというのはおばさんの妹で、繁華街に店を出しているが、亭主は随分前に死んだし、子供は戦地に行っていて、今はおばさんが一人で鼻緒のすげ替えなどをやって暮らしている相当な金持ちだ。

「お店はあそこなら近いし、お母さんも私がいなくても自分の子供だけだから大丈夫でしょう。昔みたいに若い衆が何人もいるわけではないから。まつ子にも手伝わせますから」

願っても無い幸いだ。今迄、どんなに出て行って貰おうと思ったか
しれないが、下駄やの妹がその度に騒ぎ、財産を分けろとか、
生活費を沢山出せとか云って、政治郎達には不可能な要求を突き
つけて来た。

貞子も台所でこれを聞いて喜んでいる筈と思った政治郎は
「では何とかしよう。引越しとか、いろんな予定を立てておく
といい」

「よろしくお願い致します」そういうと親娘二人は頭を下げて部
屋に戻った。

「頼んでも出てくれないと思っていたのに、一体どうしたんでし
ょう、戦争の最中で食料もこんなに足りない時期なのに・・・」

そういいながら貞子は出て来た。

「お父さん、私は万歳ですよ。少しでも早く出て貰いましょう」
妻のある旦那は倒産した後病に倒れ、その妻子に食わせてもらう
より道のなかった女にとって鬱憤を晴らす何物もなく精々する事
といえ、貞子の一番忙しい時に、見て見ぬ振りをする事だった
。おばさんとしても、確かに不遇の人生であったろう。

何かを頼んでも、知らぬ顔をしていた。口惜しがっても勘当され
て実家を追い出されてきた貞子に口説く相手はいなかった。

台所で雑巾掛けをするおばさんの所へ幼い子が、「おにぎりを作
って頂戴」とせがんだら、雑巾掛けをしているその手を洗いも
せず、釜の蓋を開け、醤油を少したらし、握って与えているのを
貞子は見ってしまった。言え、陰でそれ以上の意地悪をされる。政
治郎に訴えてもただ、聞くだけだった。こんな関係の家族と一緒
に暮らすのが間違いだった。何も云えない政治郎もあわれだった

。

「うん、気が変わらないうちに早速にも予定を立てよう。うちに来てから十何年・・・娘と二人きりなんてなった事ないからな、万歳したいのは向こうかもしれないよ。たまには親子二人になりたいのだろう。長い間考えてきたんだから、何とかするだろう。考えてみりゃあ、可哀想な親娘よ。まあ、出来るだけの事はしてやろう」

「そんな事をいえばうちだって家族だけという事は無かったんです。お父さん、清々するのはこっちの方だわ。本当に・・・財産寄越せの何の彼のと散々ごねたのに・・・」

「金が欲しかったら金持ちのヒヒ親父を選べば好かったんだよ、でもうちのおじいちゃんはその頃倒産した後で財産も無かったのに、どうやってだましたんだろう、あの通り、一夜乞食といわれて此処へ辿り着いたばかりだというのに・・・」

それから一週間位かかったが、無事二人は妹の家に落ち着いた

。男手は既に殆ど無く、まっちゃんとお父さんがリヤカーで何度も運んだ。台所の用品は、大人数だったのでも余分にあったが、風呂敷包み一つで嫁に来た貞子には、若い娘に持たせてやるような着物は一枚も無かった。有ったとしても戦争が始まってからはほぐしていろんな物に仕立てなおしてしまっている。

引越し先は本当に立派な二階家で、広すぎる位の家だった。余っている部屋は近くの憲兵隊の将校さんが二人、部屋を借りるだけで好い、と云ってそこにも貸す事になった。家族が来る事があり、女世帯で無用心だったこの家も、いくらかは賑やかになった。

軍人さんは時々、普通では手に入らないようなお砂糖とか、お菓子を持って来てくれるので結構人気があった。

ただ、偉い人は立派な家を要求するので何処でも良いという訳には行かないようだ。

それからまっちゃんは毎日、この二階家から自転車で店に通うようになった。いつもお母さんの所に寄って朝のごはんを食べ、お店にいるおばあちゃんの食事を持ってお店に行った。

「おばさんは昼間何をしているんだい？」

とまっちゃんに聞くと

「寝ているんだって」

と言う答えが返ってきた。それは殆ど毎日だった。

「うちに来て十何年も過ごして来たんだから、好きなようにさせてやるんだね。それにしても良く寝るね。夜も寝ているんかい？」

」

「うん、夜も寝てるよ」

「軍人さんはいつもいるの？」

「いつもはいないよ、家族が来た時だけだから二人で月に四～五回くらいかな？もっと少ないかな？」

「じゃあ、家賃の貰い得だね」

「でもその代わり、掃除だけはしてやるんだよ」

「じゃあ、軍人さんの部屋のお掃除だけかい？」

「うん、それも散らかっていないから直ぐ終るんだって」

貞子はおばさんの為に珍しい物が手にはいたりすると必ず持たせてやった。時々お弁当も作って持たせてやった。

お弁当くらいで済むなら安いものだ、と貞子は思った。離れて暮らす喜びは想像以上に大きかった。お弁当を持たせる位は安いものだと思い、寝てばかりいるお婆さんの為には貞子はせっせとお弁当を作った。自分の分など多分面倒で多分作らないと思ったからだ。

家族だけで暮らせなかった双方の家族が、それもこのような関係のもとで女中のように使われているふたりのあわれさを改めて感じた。

「私だって嫌だったんだもの、せいぜい食べ物位しか援助してやる事は出来ないわ、今はお金よりお米の大事な時代だからこれが一番好い」

そんな日を送っているうちに時々警戒警報のサイレンが鳴るようになった。日増しに戦況は厳しくなっているようだ。

お婆さんの今住んでいる家は下駄やの妹の二階家で、この拘置所の前にあった。政治郎や子供達は引越しで行っているから知っているが、貞子はまだ行った事がないので、一度行ってみようかと思っているうち、三月(みつき)は過ぎ、半年も過ぎ、一年も経ってしまった。

去年の暮もお餅の時は新井の世話でもち米が一俵手に入った。

今度はうまくいき、捕まらなかったのもみんなにも充分分けてやれたが、これから一体どうなる事やら、と心配しながら貞子は一度行きたいと思っていたお婆さんの所へ出かけた。

本当に立派な家だなあとと思いながら玄関をくぐると、お婆さん達の部屋は二階だと聞いていたので「御免下さい」と大きな声で叫んだ。

何度呼んでも降りて来ないので、勝手に階段を上がって、部屋に行く

障子は閉められていた。

「おばさん、いるのかい？」

と声をかけて障子を開けると、おばさんはふとんの中で寝ていた

。「すみません。だるいんで寝ていたんですよ」

と起きようとするので、

「寝たままでいいよ、用事があるわけではないから。一度来たかっただけだから」

と手土産のお米と新聞紙で包んだ卵の包みを枕元においた。

「随分長いこと寝てばかりいると言うので心配で来てみたんだけど、どこか悪いんじゃないのかい？」

「私は身体が丈夫位しか取り得が無いんで、風邪ひとつひいたこと無いんですよ、お母さん、今は食べ物にも不自由するご時勢ですから、寝ていたほうがらくだから寝ているんです。動くとおなかが空くし、このほうがお金かかんないからね」

と、首をすくめて笑っていた。

うちへ帰った貞子は政治郎に今日の事を話した。

「可笑しいですよ、こんなに寝てばかりいるなんて、お医者さんに診て貰ったほうが好いですよ」

「あした、そこの大柿内科に頼んでみるよ、お金がかかるので行かなかつたんだらう、まあ、其れくらいはみてやるよ」

おばさんが此処を出てからのことはあまり精しくは聞いてもいなかったが、実家が病院の貞子は、他の人よりは幾らか病気については知識がある。大きい病気のような気がして貞子の胸は騒いだ。

大柿医院は子供達の掛かりつけの内科医で、随分お世話になっていた。政治郎がいつもお医者さんと呼びに行く係りで、良く夜中に頼みに行った。七人も子供がいてみんな弱かったからそれが政治郎の仕事のようだった。

大柿医院の四～五軒下に車引きがいて、そこで車を頼み、大柿医院に駆け込んだ。戦争でガソリンが使えないので、車引きの仕事は多かった。

それに往診は狭い道を入れて行く事が多い。人力のほうが便利で、政治郎は人力車を頼んでから大柿先生のところへ寄って「あちらの方をよろしくお願いいたします」と頼んでいった。

店に帰ると、大柿先生からの伝言で、明日来るようにとの事だったが、心配だったのと、近いので遅かったが帰りがけに寄ってみた。

「今日の検査の結果では肝臓です。それも相当やられている。眠いのもだるいのもそのせいです。腎臓も少し悪いようだ」と言った。

「どんなくすりを飲むんですか？」

「多分何をやっても手遅れです。相当前から悪かったようだね？」

「うちにいる時は何とも無かったんです。到って元気で顔色も良かったし、どちらかと言うと色は白い方でしたが、最近は何と言うか、青黒く感じましたねえ。年を取ったからと思っていましたけど・・・」

「あれは年のせいではありません。病気のせいです。近いから週に一回位往診します。くるまはいらないよ。くるまやさんも年をとって大変らしいから。ほんとに近いから大丈夫。

お薬は無くなったら娘さんに取りに来させなさい」

「済みません」

政治郎は頭を下げ、そう言って帰って行った。

「まっちゃんにはどういっておこう」

「そうですねえ、いきなり云っても何だから、様子を見てからにしましょう。手遅れだと云っても直ぐ死ぬわけではないでしょうから」

「診察の結果は、肝臓と少し腎臓も悪いと云われたと云っておく事にしよう。どうせ毎日大柿先生が診察に来てくれるんだから、そのうちに先生から話して貰おう」

「ただの疲れでは無い、と思いましたよ。行ってみて良かった。やっぱり未だまっちゃんは子供ねえ。ここにいればもっと大変だったんだから、出来るだけの事はするわ。でも、運の無い二人ねえ。出て直ぐ発病したみたいだから」

「しょうが無いさ、こっちから出ていってくれと頼んだわけじゃあないし、まわりの人でもそれは知っているから」

未だ病気のことをあまり知らない娘はいたって楽天的だった。かと云って手遅れがどの位の状態を示すのか、誰にもわかることではない。すっかり治らない病気は他にも沢山あった。

結核などと言われれば、人は恐れをなして離れるくらいなので、そんな事のない肝臓や腎臓など、まつ子にとっては気にも留めないくらいだった。風邪が長引いている位の感覚だった。

大柿先生からは良くもならない、酷く悪くもならないが、少しずつ悪くなっている、との事だった。

或る日、まっちゃんが

「お母さん、母ちゃんの白目が少し黄色いんだよ」

と云ってきた。黄疸だ、これは大変だ、と思った貞子は

「これから大柿先生の所に行ってそれを云って来なさい。多分すぐ往診してくれるから・・・」

とまっちゃんを直ぐ大柿医院に走らせた。

黄疸が出ては若しかすると・・・

そんな予感がした。黄疸が出るとなかなか消えるのは難しい。

最初感じた 若しかして・・・という思いがよみがえった。

梅雨に入り、毎日蒸し暑くじめじめしていた。

お醤油の上の方に白い黴(かび)が浮いている。

ああ、嫌な季節だなあと思いながら卓袱台(ちゃぶだい)を拭いているとその卓袱台にも幾らか黴が見えた。

これではお味噌にも黴が生える、と思いながらふきんをゆすぎに台所に行くと、出掛けたと思ったまっちゃんが立っていた。

「お母さん、かあちゃんは酷く悪いの？」

「どうして？」と聞くとしくしく泣き出した。

「どうしたの？」と聞くと、
「あの本を見たんだよ」と云った。
貞子がいつも傍らに置き、大変に評判の良い赤本が置いてあった。
赤本は、一軒に一冊は必ず置いてあるという民間療法などを書いた本で、みんなこの本を頼りにしていた。
貞子もおばさんの事で良く見ているので、黄疽の所にしおりを挟んだままにしておいたのを何気無く見たらしい。
「しおりの所が出ていたんで、見たら・・・」
あまり良い事は書いてなかった。

「治る人もいるし、治らない人もいるからね。行きながら大柿先生に往診を頼んで行きなさい。あとでお母さんも行ってみるから」

そうは云ったものの、自分でも読んだし、黄疽についても良く知っていたので、最近はいつまでもつかという段階だと思っていた。

。黄色い色は薄くはならなかった。大柿先生も毎日のように往診してくれるのだけれど、少しも良くはならず、時間の問題と云われていた。

ある夜更け、ドンドンと雨戸を叩く音に貞子が玄関を開けるとまっちゃんが「お母さん」と抱きつくなり、震えて泣き出した。
「火の玉が、火の玉が・・・」あとは泣くばかりだった。なだめながら聞くとところによると、あまり蒸し暑いので窓を開けようとふとんから出て廊下に行った。音も無く雨は降っている。そっとガラス戸を開け、眠い目をこすりながら風に当たっていた。母ちゃんに夜風を当ててはいけないような気がしたのでそのまま廊下に座っていたら、西隣の家のでけあたりがぼうっと明るい感じがして来た。

今頃何だろうと良く見たら・・・・・

ほのかに青白い火の影がこっちへゆらゆらと・・・・・そしてまつ子の前をゆらめきながら東のほうへ去った。

(まさか火の玉?) 夏の夜の講談などで誰も火の玉は知っている

。腰が抜け、声も出ず、這うようにして母ちゃん! と縋りついたけれど、母ちゃんはいくら揺り動かしても返事をしなかった。

ここまで来るのがやっとだった。これだけ話す間中も震えていた

。そして良く見ると、はだしで何も履いていなかった。

貞子も震えるような気持ちだった。

話には聞いた事がある。怪談など、本で読んだ事もある。けれど出たという人にも見たという人にも出会った事は一度も無い。

いつの間に帰ってきたのか、政治郎も傍で聞いていた。彼とても講談などで聞いた事はあるが実際には無い事だと思っていた。

「直ぐ行く。俺が見て来る。まっちゃんはこっちで足でも洗って休ませておけ」

その夜、おばさんは死んだ。不幸な女がひとり消えた。

火の玉が何を意味するのか、誰にも判らなかった。

若い頃からのめかけ暮らし、財産を失っただんなのうちに引き取られての女中生活、引き取られていくらしないうち、だんなも男の子もあい次いで逝き、たった一人の娘を残したままあの世に逝く。

梅雨も明けた或る夏の暑い日 古山市にある菩提寺におばさんは埋葬された。おばさんの妹の下駄やと娘のまつ子、政治郎と幼い三人の娘だけが同行した。
この幼い三人の娘が火の玉について聞いたのは戦後である。



作：ほりひとみ